

“是…的”構文の焦点と時制の問題

郭 穎 侠

要 旨

汉语中の“是…的”結構内容龐雑,包含多种不同性质的情况。在对外汉语教学中是一个难点。近年随日语中关于ノダ的研究的展开,将“是…的”結構与ノダ句从意义、功能等方面进行比较的论文也有数篇发表。但是,至今关于“是…的”結構的本质仍然没有定论。这种情况给汉日对译和外语教学带来很大不便。翻译及教学现场需要一个深入浅出易于接受的理论。本文通过对大量例句的分析,并借助其他学者的研究成果,确定经常使用的“是…的”結構的意义、功能及其与日语中的ノダ句的对应关系。希望对汉日对译和外语教学能有所帮助。

キーワード…… 動作動詞 焦点 成分 ストレス

はじめに

中国語でよく見られる構文に、一般に強調を表すとされる“是…的”構文がある。使用頻度が高いわりに構造的な成り立ちが明らかになっておらず、日本語に訳す時に直訳の形のノダ文と対応する場合と対応しない場合がある。これらの問題点に注目し、近年“是…的”構文に強い関心が向けられている。木村(2002)のようにその機能を究明するのに努める研究もあるが、日本語と中国語を比較する杉村(1980、1982)王亜新(1997)などもある。しかし、いまだ不明な点が多く、“是…的”構文と日本語のノダ文の対応関係も明らかになっていない。そこで、本稿では、先行研究をふまえた上で、構文中の各成分を検討し、ノダ文と“是…的”構文の対応関係を考慮に入れ、“是…的”構文の構造と機能の究明を試みる。

以下では、1 考察対象、2 述語の条件、3 時制の問題、4 “是”の省略、5 目的語の位置の問題、6 焦点、7 構文が帯びるニュアンス、8 ノダとの比較、の順に検討を進めていく。

1. 考察対象

“是…的”構文は一般に、形式上一つの文の中に“是”と“的”が前後に呼応して現れ、その間に動詞、動詞フレーズなどが位置する構文のことをいう。ただし、“是…的”構文には異なる性質のものもあり、基準によっていくつもの種類に分類することができるが、本稿ではもっ

とも多用される種類の一つである次のようなものを取り上げる。

- (1) 是李科长传达的那件事。(李課長がその件を伝えたのです。)
- (2) 中学时我是学的俄语。(中学時代私はロシア語を勉強したのです。)
- (3) 他这回是从上海来的。(彼は今回上海から来たのです。)
- (4) 爸爸是去的加拿大。(父はカナダに行ったのです。)
- (5) 是前天来的吗？(おととい来たのですか。)
- (6) 这书不是买的。(この本は買ったではありません。)
- (7) 是不是在山东当的兵？(山東省で服役したのですか。)

上に挙げている例文は普通“是…的”構文と言われているが、ほかの“是…的”構文から区別できる特徴がある。述語が必ず動詞である。“传达”(伝える)、“学”(勉強する)、“来”(来る)、“去”(行く)、“买”(買う)、“当兵”(服役する)など。事柄は発生済みである。発生したことを認識した上での発話になる。否定文と反復疑問文以外は“是”が省略可能である。口語では、“是”が省略された形で使うことが多い。つまり、(1)から(5)までは次のようになる。

- (8) 李科长传达的那件事。(李課長がその件を伝えたのです。)
- (9) 中学时我学的俄语。(中学時代私はロシア語を勉強したのです。)
- (10) 他这回从上海来的。(彼は今回上海から来たのです。)
- (11) 爸爸去的加拿大。(父はカナダに行ったのです。)
- (12) 前天来的吗？(おととい来たのですか。)

“是”の文中での位置にかかわらず、省略された後の文はもとの文とほぼ同じ意味を持つ。何らかの成分が強調されている。特別な文脈がない場合、下線部分が強調されている。急に発せられる言葉ではなく、何らかの背景(文脈などの言語化された場合と言語化されていない場合の両方考えられる)がある。(1)を例にとれば、「誰かがその件を伝えた」ことが話し手も聞き手も知っている文脈のうえで、その誰かとは李課長であるということを強調し(説明を加え)ているのである。場合によって目的語が移動可能である。例えば(1)が次のようになる。

- (13) 是李科长传达那件事的。(李課長がその件を伝えたのです。)¹⁾

本稿はこれらの特徴を持つ“是…的”構文を対象とする。ほかの、性質の異なる“是…的”構文と区別するために「過去+強調の“是…的”構文」と名付けてもよいが、本稿ではこの種のものしか触れないので、単に“是…的”構文と呼ぶことにする。

2. 述語の条件

“是…的”構文の述語は必ず動詞である。宋玉柱(1981:274)によれば、述語動詞は動作動詞でなければならない。一回性動詞でもいいし、非一回性動詞でもいい。

(14) 他是在火车上洗的臉。(彼は列車の中で顔を洗ったのです。)

(15) 他是 1978 年死的。(彼は 1978 年亡くなったのです。)

(16) *当时你是在的哪儿?(その時あなたはどこにいたのですか。)

宋玉柱(1981)によれば、(14)の述語は非一回的動詞で、(15)は一回的動詞で、“是…的”構文を使っても問題はないが、(16)の述語は非動作動詞なので、非文になるという。

確かにこの種類の“是…的”構文に瞬間動詞も、持続動詞も現れるが、状態動詞や形容詞、名詞述語は現れない。しかし、動作動詞や一回的動詞とは何かということについては明言していないので、ここで少し検討してみたい。

(14)の述語動詞“洗(洗う)”は確かに顔を洗うという動作を表すし、何回でも繰り返されるが、話者が列車の中でやったその一回だけについて話している。(15)の“死”は死んでいるという状態をいうのではなく、“死ぬ”という動作(または変化)が瞬間的ではあるが、発生したというふうに捉えてその発生の時点を説明している。しかし、(16)の“在”はそこにいる状態を描写するもので、何事も発生したり変化したりしていない。ゆえに、“是…的”構文は使えない。

(17) 奶奶的腰弯得很厉害。是年轻时累的。

(おばあちゃんの腰がひどく曲がっている。若い時に苦勞をしたのです。)

(18) 她是 3 年前住的院。

(彼女は 3 年前に入院したのです。)

(17)の述語の“累(疲れる)”は形容詞としても使えるが、ここでは「疲れた」という状態を表すのではなく、“弯(曲がる)”という結果をもたらす「苦勞をした」という意味で、動詞として使われているのである。また、(18)の“住”は何日か何カ月続いたはずであるがそれを全体的に一つの入院というできごとという角度で捉えている。つまり、ここでいう動作動詞や一回性動詞というのは動詞自体のもつ性質をいうのではなく、文中での運用上現れる性格を指すのである。

3.“的”は時制を表す助詞である

“是…的”構文の述語は必ず動作動詞(動作や変化を表す動詞として使うもの)であることをみてきた。その動作がなぜ現在や将来のことではなく過去(あるいは発生済みといったほうがよりふさわしい)なのか。ここでは、このことについて検討してみたい。

3.1 “了”との対照的分布

中国語では、過去を表す時態助詞として“着”、“了”、“过”がある。その中の“了”が“的”

“是…的”構文の焦点と時制の問題（郭）

と似たような機能をもっている。

(19) 他听了这张 CD。(彼はこの CD を聞きました。)

(20) 他听的这张 CD。(彼はこの CD を聞いたのです。)

過去のことについて述べる時、“了”と“的” 両方使えるが、“了” は一つの出来事を述べるだけで、“的” は、何かを強調しながら説明をする。“了” で一つの出来事を述べてから、“的” を使って、さらに説明を加える例は非常に多い。

(21) 我昨天见到李明了。是在市政府大厅偶然见到的。

(昨日李明に会いました。市役所のロビーで偶然会ったのです。)

(22) 三毛自杀了。谁也不知道她是因为什么自杀的。

(三毛が自殺しました。なぜ自殺したのか誰にも分かりません。)

(23) 电视坏了。是小孩子淘气鼓弄坏的。

(テレビが壊れました。子供がいたずらして壊してしまったのです。)

また、“了” も“的” と同じように“是” と呼応して使うことができる。

(24) 天是冷了,中午冰也不化了。

(気候がたしかに寒くなりました。昼でも氷がとけません。)

(25) 他是病了,不然怎么会不来呢?

(彼はたしかに病気になりました。でなければ、どうして来ないはずがあるでしょう。)

(26) 他是走了,我不骗你。

(彼はたしかに出かけました。うそではありません。)

上の例文から分かるように、形容詞述語や単純な動詞述語動詞の場合、“是…了” の形が使われている。この場合、“是…的” 構文は使えない。

“是…了” は述語動詞部分を強調する。新情報を提供するより、旧情報を改めて強調している。

“是…的” はある部分だけを新たに提示し、重点をおいて述べる。それに対して、“了” は文全体を強調する。両者の分布は対照的で、ふつうは置きかえることはできない。

“是…的” と“是…了” の相違を表にまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1 “是…的” と“是…了” の相違

	特殊な文脈がない 時強調する成分	構文の機能	述語の制限	情報度
是…的	連用修飾語	強調 + 説明	動作・変化を 表す動詞	新情報を提供

是…了	文全体	強調	動詞・形容詞	旧情報を強調
-----	-----	----	--------	--------

(出所：筆者作成)

3.2 “ 的 ” は時制を表す助詞である

今までの研究で、“ 是…的 ” 構文の “ 的 ” は多くの場合語気助詞と見なされている。しかし “ 的 ” と “ 了 ” の過去を表す用法が対照的で、“ 的 ” には “ 了 ” と同じような時態助詞の面があることが認められる²⁾。というのは、この “ 是…的 ” 構文の場合、“ 的 ” は過去のマーカーとなっているのであるが、語気助詞と見た場合には、その過去の意味の出所がないからである。ここで一つのテストをしてみるとすぐ分かる。

(27) 我们是坐公共汽车去的。

(私達はバスに乗って行ったのです。)

(28) 他的断指再植手术,是张大夫做的。

(切断された彼の指の接合手術は張医師が行いました。)

上の二例の中の “ 的 ” を除いても、文の強調の意味も、強調される部分も変わらない。変わるのは時制だけである。過去に発生した事柄の表現だったのが、将来発生する事柄についての表現になる。

(29) 我们是坐公共汽车去。

(私達はバスに乗って行くのです。)

(30) 他的断指再植手术,是张大夫做。

(切断された彼の指の接合手術は張医師が行います。)

つまり、特に時間を表す言葉のない文において、“ 是…的 ” 構文の “ 的 ” があれば、過去を表すが、“ 的 ” がなければ、過去でなくなる。将来の時間を表す言葉は “ 是…的 ” 構文と併用できない。

(31) * 我们是明日坐公共汽车去的。

(* 私達は明日バスに乗って行ったのです。)

4. “ 是 ” の省略

“ 是…的 ” 構文の「説明」や「強調」というモダリティの由来は “ 是 ” にある。 “ 是 ” は前を受けて説明を加えたり弁明したりするという機能を持っているのである。

(32) 李大夫看这种病是看一个好一个。

(李医師がこの種の病気を診れば誰でも治ります。)

(33) 字写成这样,是(因为)钢笔不好。

“是…的”構文の焦点と時制の問題（郭）

（字がこうなってしまったのは、ペンが悪いからです。）

この場合、“是”は肯定を強く押し出す。形容詞・動詞などを目的語にとり、「確かに…だ。」という意味を持つ。

（34）没错儿,他是走了。

（まちがいになく、彼は確かに行ってしまいました。）

“是”は文全体を強く肯定する。

（35）是下雨了,不骗你。（雨は確かにやんだのだ、うそではありません。）

（36）父亲打他。（父は彼を叩きます。）

（37）父亲用烟袋锅打他。（父はキセルの雁首で彼を叩きます。）

（38）父亲是用烟袋锅打他。（父はキセルの雁首で彼を叩くのです。）

（39）父亲昨天用烟袋锅打了他。（父は昨日キセルの雁首で彼を叩きました。）

（40）父亲昨天是用烟袋锅打了他。（父は昨日確かにキセルの雁首で彼を叩きました。）

（41）父亲昨天用烟袋锅打的他。（父は昨日キセルの雁首で彼を叩いたのです。）

“的”がこの出来事は過去発生したことであることを表明し、“是”はそれと呼应して、間に挟まれる“用烟袋锅”の部分に焦点を当てる。ただしこの“是”は肯定を強く押し出すので、強い口調になり、相手に不快感を与えやすいので、それを和らげるために話し言葉でよく省略される。ただし、“是”が省略されても、意味機能的には文全体は変わりはなく、依然として、“是…的”構文として扱われる。

5. 目的語の位置

“是…的”構文の文は一般に“的”で終わる。“是”は文頭にも文中にも現れるが、“的”は文の最後に位置する。しかし、一つだけ“的”の後に置くことができる成分がある。述語動詞の目的語である。もし“的”がムードを表す助詞（語気助詞）であれば、必ず文末にくるはずであるが、目的語の前におけるということは、“的”は語気助詞でないことを表明しているのである。

李讷・安珊笛・张伯江（2000: 151）は現代の北京口語の作品において、“的”を前にもっていくのが文末の用法に劣らないし、“的”の後ろに置かれる成分も複雑化していると調査の結果を述べている。

しかし、“是…的”構文では、述語動詞の目的語が“的”の前に置くのと後ろに置くのではどう違うのか。あるいは、違いがないのか。まず、邢福义（1996）と張黎・佐藤晴彦（1999）の二つの説を見てみよう。

邢福义（1996:238 筆者訳）

準時態助詞“的”は文末で使われると、語気を表す助詞になる。ただ、準時態助詞

として使われる時、已然の時態を強調するが、語気助詞として使われる時は確信の語気を強調する。

(42) 大哥去年提的教授。

(“的”は準時態助詞で、意味的に“了”にかなり近い。)

(43) 大哥去年提教授的。

(“的”は語気助詞で、事実を確信することに重点を置く。)

張黎・佐藤晴彦(1999:88-89)

ときには“的”の位置の違いにより、ニュアンスが微妙にことなってくる。

(44) A 小王是昨天去的北京。

(45) B 小王是昨天去北京的。

共通点:ともに“是”の後の“昨天”が新情報(そこに焦点がある)

相違点: Aの“的”の後の“北京”は旧情報。Bの“的”の前の“北京”は新情報・旧情報ともありうる。また、Aは王君はもう上海か南京に行き、北京にはいない可能性もある、ということになるが、Bは王君は今も北京に滞在している、という違いもある。

両者を比較してみれば張黎・佐藤晴彦(1999)のほうが妥当だと思われる。邢福义(1996)は“的”が準時態助詞であるか語気助詞であるかの根拠として、位置が違う以外何も提示していない。また二つの例文もさほど差が感じない。実際では、この二つの例文に“是”がないので、文脈やストレスによって、“去年”も“教授”も新情報である可能性があるし、両方とも焦点になり得る。

主語も目的語も動詞も単純な場合、主語しか強調できないし、“的”は最後におくことができない。

(46) 是我浇的花。(私が花に水をやったのです。)

(47) 甲: *是谁浇花的?

乙: *是我浇花的。

(48) 甲: *你浇的什么?

乙: *我浇的花。

(49) 甲: 你浇的什么花?(どの花に水をやったのですか。)

乙: 我浇的牡丹花。(牡丹に水をやったのです。)

述語動詞の目的語がその動作の結果である場合、“的”を動詞と目的語の間に置くと文には二通りの意味がとれる。いま一つは“是…的”構文とする場合の意味で、もう一つは主語が省略された判断文の場合の意味である。

(50) 是他借来的书。

(彼が本を借りてきたのです。 “是…的”構文)

“是…的”構文の焦点と時制の問題（郭）

（これは彼が借りてきた本です。 判断文）

（51）是爸爸做的蛋炒饭。

（父が玉子チャーハンを作ったのです。 “是…的”構文）

（これは父が作った玉子チャーハンです。 判断文）

（52）我们单位分的房子。

（私の会社がこの家を割り当ててくれたのです。 “是…的”構文）

（これは私の会社が割り当ててくれた家です。 判断文）

“是…的”構文と見る場合、それぞれ主語の“他（彼）”、“爸爸（父）”、“我们单位（私の会社）”が強調される。単純な判断文とみる場合それぞれ主語の“这书（この本）”“这饭（この料理）”“这房子（この家）”が省略されたものである。

6. 焦点の問題

“是…的”構文では一つか一つ以上の成分が強調されている。強調された成分は文の焦点である。スポットともいう。基本的に文のすべての成分が焦点になれるが、実際の運用においては主語や述語、目的語を強調するのは少なく、主に述語の動作を具体的に説明する成分が焦点になる。つまり、動作の手段、方式、場所、時間、道具、対象、原因、状態、目的などを表す成分である。

“是…的”構文では一般的に強調したい部分を“是”と“的”の間におく。つまり、“是”と“的”でマークされるのである。しかし、述語動詞は中国語の語順制限でかならず“是”と“的”の間に位置する。前の「2. 述語の条件」のところで検討したように、他の成分が一つもない場合しか述語動詞は焦点にならない。

また、「5. 目的語の位置」で見たように目的語もほかの成分と違う振る舞いをしている。

次の6.1から文の各成分が焦点になるかどうかを具体的に見ていきたい。

6.1 連用修飾成分が焦点になる場合

“是…的”構文は一般的に連用修飾成分を強調する。述語動詞を修飾する成分を“是”と“的”の間におき、焦点をあて、強調的に説明する。とくに目的、道具、時間、場所、などを表す部分が焦点になりやすい。

6.1.1 目的、道具、時間、場所などが焦点になる場合

“是…的”構文は特殊な意味的制限の文脈がない場合、連用修飾成分を強調する。目的、道具、時間、場所、などを表す部分があれば、そこが焦点になる。

- (53) 李老师来了。(李先生が来た。)
- (54) 李老师是为给学生买资料来的。
(李先生が学生たちに資料を買うために来たのです。)
- (55) 李老师是坐飞机来的。
(李先生が飛行機で来たのです。)
- (56) 李老师是昨天来的。(李先生がきのう来たのです。)
- (57) 李老师是从上海来的。(李先生が上海から来たのです。)

6.1.2 理由を表す節の場合

“是…的”構文は一般に、理由 原因 を表す句や節と共起しにくいとされている。しかし、6.1.1 のような目的や道具、時間を強調する文ほど一般的ではないが、共起することはできる。木村(2002:4)が非文だとしている次の例は実際には使われているのである。

- (58) 甲：他为什么迟到的？
(彼はどうして遅刻したのですか。)
- 乙：因为遇到汽车事故迟到的。
(交通事故に遭って遅刻したのです。)

乙の文が問題がないことは、副詞“才”を“迟到”の前に挿入すれば、その適格さがもっと分かるからである。そして、この文は典型的な解説文と言える。次の文も同じである。

- (59) 阿眉是因为哥哥结婚才决定回国的。
(阿眉は兄が結婚するので、帰国を決めたのです。)

6.1.3 状態を表す節の場合

状態を表す節も木村(2002:12)などでは使わないとされている。たしかに、実際のところ使用頻度が低いが、しかし使用することは可能である。

- (60) 她是流着眼泪读的那封信。
(彼女は涙を流しながらその手紙を読んだのです。)
- (61) 我是吃饱了回来的。
(私はお腹いっぱい帰ってきたのです。)
- (62) 甲：没有凳子，她是怎么吃的饭？
(腰掛がないのに、どうやってご飯を食べたのですか。)
- 乙：她是站着吃的。
(彼女は立ったまま食べたのです。)

6.2 主語が焦点になる場合

主語が強調される場合、“是”は主語の前に位置する。それに対して、主語を強調しない場合、“是”は主語の後ろに置かなくてはならない。つまり、“是”と“的”の間に位置する成分が焦点になるという原則に従うわけである。

(63) 是老李说的。(李さんが言ったのです。)

(64) 老李说的。(李さんが言ったのです。)

(65) *老李是说的。

(64)は(63)の“是”を省略した文で、意味も同じである。この文脈で主語しか強調できないが、(65)は主語が強調されておらず、焦点がないので、非文である。

(66) 我从窗口看见的。(私が窓から見たのです。)

(67) 是我从窗口看见的。(私が窓から見たのです。)

(68) 我是从窗口看见的。(私は窓から見たのです。)

(67)と(68)は焦点が違う。(66)は“是”がないため、焦点になる成分は制限がなくなり、一応主語の“我”も連用修飾語の“从窗口”も述語動詞の“看见”も焦点になりうるし、一つ以上の成分が同時に強調されることもある。この点については「6.7 焦点の決め手」で述べる。

6.3 述語が焦点になる場合

述語はふつう“是…的”構文の焦点にならない。というのは、“是…的”構文はある動作や変化が発生したことを承知した上での発話なので、述語の部分は当然既知情報である。しかし、何かが発生したことは分かるが、いったい何が発生したかと言うことを聞く場合、述語動詞を焦点にする“是…的”構文が使われるのである。

(69) 甲：車が凹んでいるところを見て 是撞的吗？(ぶつかったのですか。)

乙：嗯,是撞的。(ええ、ぶつかったのです。)

(70) 玄関に置いてあるサラダ油や箱詰めのりんごとみかんについて家族に説明している

是分的,不是买的。(もらったんです。買ったのではない。)

(71) 甲：怎么到这儿来了？(どうしてこんなところに来たの。)

乙：你来的嘛,我只是跟着。(君が来たんだよ。僕はあとをついてきただけ。)

上の例文から分かるように質問に対する答えや対比的に言う場合以外、このように述語動詞だけを強調することはできない。

(72) *他是来的。(？彼は来たのです。)

(73) *他是去的。(？彼は行ったのです。)

日本語で、ふつう、前に文脈がない場合に、「太郎は置いた。」のような文が排除されるのと同様である。

(74) *我是回来的。(? 私は帰ったのです。)

(75) 我是吃饱了回来的。

(私はお腹いっぱい帰ってきたのです。)

(76) *我和你结婚的。

(? 私はあなたと結婚したのです。)

(77) 我可不是图你什么才和你结婚的。

(私は何かを求めてあなたと結婚したのではない。)

また、述語動詞以外の成分が“是”と“的”の間に入る場合、焦点は述語動詞ではなく、そのほかの成分になる。

主語と述語を同時に強調する場合がある。

(78) 不是我给的,是她要的。

(私があげたのではなく、彼女が要求したのです。)

6.4 目的語が焦点になる場合

目的語が強調されるのは次のような場合である。

(79) 中学时我是学的俄语。(中学校の時、ロシア語を習ったのです。)

(80) * 中学时我是学俄语的。

(81) 在图书馆她是看的『读者』。(図書館で彼女は『読者』を読んだのです。)

(82) * 在图书馆她是看『读者』的。

強調された目的語が“的”の後に置かれている。その理由は次の通りである。

(83) 我是搞俄语的。 = 我是搞俄语的人。(私はロシア語関係の仕事をする人である。)

(84) 她是管后勤的。 = 她是管后勤的人。(彼女は総務である。)

つまり、中国語では“教书的”(教師)、“开车的”(運転手)のような形式で分類を表す。しかし、(80)の“在中学时学俄语”、(82)の“在图书馆看『读者』”などはあまり細かく、具体的にすぎる。それによって人を分類することはできないので、“的”を後ろに置くことができないのである。

目的語が強調される場合、“是”と“的”の間は述語動詞しか入らない。もし他の要素が“是”と“的”の間に入ったら、その要素が強調されることになる。

(85) 我是中学时学的俄语。(私は中学校の時にロシア語を習ったのです。)

(86) 她是在图书馆看的『读者』。(彼女は図書館で『読者』を読んだのです。)

この点は“是”と“的”の間に挟まれるのが焦点だということに反している。

6.5 連体修飾語が焦点になる場合

主語や目的語の修飾語が焦点になることもある。

(87) 甲：他们抄的什么书？（彼らは何の本を写したのですか。）

乙：抄的英文书。（英語の本を写したのです。）

(88) 甲：你点的什么菜？（どんな料理を注文したのですか。）

乙：点的你喜欢的菜。（君が好きな料理を注文したのです。）

(89) 甲：是谁的弟弟干的坏事？

（誰の弟がこないたずらをしたのですか。）

乙：是王东的弟弟干的。

（王東の弟がしたのです。）

6.6 数量詞は“是…的”構文の焦点にならない

“是…的”構文は、数量表現を焦点にすることができない。このいわゆる「数量表現との非共起性」について、木村英樹（2002:12）は二つの理由を挙げている。一つは、数量は通常事物を区分限定するための基準になり得ないことである。もう一つは、動作行為を区分限定するための基準には、「量」という非離散的な概念はそれにはふさわしくないということである。これは木村の“是…的”構文の動作めあての区分限定機能説に立つ主張であるが、その説自体がなお検討の余地がある。また、「非離散的な概念」については明確な概念規定がないため、首肯しがたい。

本稿では、中国語の数量詞の根本的な性質からその原因を究明することにする。

まず中国語の数量詞は日本語の数量詞とは性質が異なる。初級の中国語教育や日本語教育でよく用いられる例であるが、日本語では、「机の上に本がある。」「空に丸い月が出ている。」と言うが、中国語では“桌子上有一本书。”“天上有一轮圆月。”と言う。つまり、中国語では無意識のうちに数量詞を入れる³⁾。ここで重要なのは、特別な文脈なしで文中に出ている数量詞は多くの場合重要な意味を持たず、新情報でも焦点でもないことである。

数量詞というのは数詞と量詞からなる。中国語では両者を区別して扱う。そして、同じ量詞といっても二つの場合がある。一つは名詞を修飾するもので、“一只猫（一匹の猫）”、“二座山（二つの山）”“三本书（三冊の本）”など、“名量詞”という。もう一つは動詞を修飾するもので、“玩一回（一回遊ぶ）”、“踢二脚（二回蹴る）”“吃三顿（三回食べる）”など“動量詞”という。この二種類の量詞によってできた数量詞の機能が違うため、以下別々に検討する。

まず、“名量詞”の場合：

(90) 甲：* 你看的几本？

乙：* 我看的三本。

上の例文においては、“几本”にしる、“三本”にしる、“书”が省略されたことがわかって、それはどんな本なのか、分からない。つまり、目的語は限定されていないのである。しかし、“是…的”構文は発生済みの動作や出来事について説明しているわけで、未定の要素があれば、文の情報量が足りないのである。すべて既定性を持つ項でなければならない。ゆえに、

(91) * 我是在超市遇见的某一个人。

が非文であると同様に、上のような例文がなりたたないのである。しかし、数量詞が入る項が既定の内容であれば、文が成立する。次の(92)では、“那”があるので、文が成立する。

(92) 我昨日看的那三本书。

(私は昨日例の三冊の本を読んだのです。)

次は、動量詞の場合：

(93) 甲：* 去的几次太原？

乙：* 去的三次太原。

この場合、情報量が足りるとしても、太原に行ったというできごとを何回かに分けているのである。(93) 甲の文では太原に行ったというできごとを何回に分けられるかについて聞いているというふうに捉えられるし、(93) 乙の文はそれは3回に分けられる、「3回の出来事だったよ」という意味になる。しかし、“是…的”構文はあくまでも一回的な動作やできごとについて説明を加える構文であるので、これらの文は成立しない。しかし、持続性の動詞でもまとめて一つの事柄として扱えば、“是…的”構文の適応は可能になる。

(94) 我去过3次太原。有两次是坐飞机去的。一次是坐火车去的。

(私は3回太原へ行ったことがある。2回は飛行機で行ったのです。そして、1回は電車で行ったのです。)

6.7 焦点の決め手

“是…的”構文の焦点は一般に、“是”と“的”の間に置かれるが、述語動詞と目的語の場合はやや複雑であることは6.3と6.4で述べた。しかし、成分の位置だけでなく、複雑な(成分の多い)文となると、どこが焦点になるかはストレスにもよる。

(95) 我是昨天下午在友谊商店买的这幅画儿。

(私は昨日の午後友谊商店でこの絵を買ったのです。)

この文においては“是”と“的”の間に“昨天下午”“在友谊商店”“买”の三つの成分がある。これらは全部焦点であることも有り得るが、一般に一つの成分だけが焦点になる。書き言葉では当てはまらないが、話し言葉では、ストレスによって区別する。つまり、上の文は三通

“是…的”構文の焦点と時制の問題（郭）

りの言い方がある。

(96) 我是昨天下午在友谊商店买的这幅画儿。(時間を強調する)

(昨日の午後、友誼商店でこの絵を買ったのです。 今日ではなく)

(97) 我是昨天下午在友谊商店买的这幅画儿。(場所を強調する)

(昨日の午後、友誼商店でこの絵を買ったのです。 ほかの店ではなく)

(98) 我是昨天下午在友谊商店买的这幅画儿。(動作を強調する)

(昨日の午後、友誼商店でこの絵を買ったのです。 もらったのではなく)

つまり、位置だけではなく、ストレスの置き方も焦点を取り立てる一つ的手段である。

また、“是”と“的”の間に成分が多く、幾通りかに理解できる時、文脈によって焦点が分かる場合も多い。

(99) 谁先动手谁不对。是她先动手的、所以她不对。

(先に手を出した方が悪いです。彼女が先に手を出したのです。だから、彼女が悪いのです。)

(100) 是她先动手的。我是没办法才还的手。

(彼女が先に手を出したのです。私は仕方がなくて返しただけです。)

要するに、“是”と“的”の文中における位置によって焦点が変わるだけでなく、実際の会話ではストレスによって焦点も変わるということである。

(101) 我点的青椒肉丝。

(私はチンジャオロースを注文したのです。)

(102) 是我点的青椒肉丝。

(私がチンジャオロースを注文したのです。 他人ではなく)

(103) 是我点的青椒肉丝。

(私がチンジャオロースを注文したので。 誰かからもらったのではなく)

(104) 我是点的青椒肉丝。

(私はチンジャオロースを注文したのです。 もらったのではなく)

(105) 我是点的青椒肉丝。

(私はチンジャオロースを注文したのです。 マーボードーフではなく)

6.8 否定文・疑問文・推量文の焦点

“是…的”構文は否定文でも疑問文でも推量文でもよく使う。

否定文：

(106) 他不是故意惹老师生气的。

(彼はわざと先生を怒らせたわけではありません。)

疑問文：

- (107) 是誰提起那件事的？
(誰がそのことをもちだしたのですか。)

推量文：

- (108) 大概又是來借書的吧。
(きっとまた本を借りに来たのでしょう。)

“是…的”構文は否定文・疑問文・推量文になっても焦点は変わらないのである。例 16 を変えれば次のようになる。

- (109) 不是老李說的。
(李さんが言ったではありません。)
- (110) 是老李說的嗎？
(李さんが言ったのですか。)
- (111) 是老李說的吧。
(李さんが言ったのでしょうか。)

7. “是…的”構文のニュアンス

“是…的”構文は常に何らかの強調を表すので、固い口調になりがちである。杉村 (1994:140) でもこのことに触れている。

- (112) 你是從哪來的？
(あなたはどこから来たのですか。)

査問口調で、相手に取り調べを受けているような感じを与えてしまう。

このような例は多く見られる。疑問文の中で強調される部分について、話者が「それが不思議」、あるいは「変」、「いけない」と思っているというふうに聞き手に理解される。

- (113) 他是怎麼當上班長的？
(彼はどうやってクラス委員になったのですか。)

話す時のストレスによって二通りの理解ができる。特にストレスを置かない場合は彼が班長になった経緯を聞いているだけであり、疑問詞の“怎麼”が焦点になる。もう一つは“怎麼”にストレスがある場合、話者は彼が班長になることに対して不満がある、或いは其の経由に何か裏があると信じてここで非難しているという理解になる。このような場合は外国人学習者は勿論、中国人でもストレスや前後の文脈と状況を(話者の表情などを含む)考慮に入れないと誤解を生じやすい。

8. ノダとの対訳

日本語のノダは説明と強調の働きを持っているとよく言われるが、野田春美（1997）に詳しい考察があるので、ここで、その術語を借りて説明したいと思う。

8.1 強調の意味での対応

“是…的”構文と対応しているのは動作を表す動詞の過去形を前接する野田春美（1997）でいうスコープのノダである。つまり、述語が動作動詞である場合、“是…的” = 「～ただ」。次は翻訳小説の例をいくつか挙げる⁴⁾。

(114) 我本来是当玩笑说的、大伙却轻率地信以为真。

(冗談のつもりで言ったのだが、みんなあっさりとそれを信じてしまった。)

(115) 诉诸语言之后的确很平凡，但当时的我并不是将其作为语言，而是作为一团薄雾样的东西用整个身心感受的。

(言葉にしてしまうと平凡だが、そのときの僕はそれを言葉としてではなく、ひとつの空気のかたまりとして身のうちに感じたのだ。)

(116) 我不记得当时是怎样回答的了，反正他是彻底找错了咨询对象。

(僕はなんと答えたのかは覚えていないが、いずれにせよ彼は質問する相手を完全に間違えていた。)

(117) “你怎么参加革命的？”

(「どうして革命軍にはいったの」)

“大军北撤时我自己跟来的。”

(「本隊が北に撤退する時、おれは自分からついてきたんだ」)

(118) 这面一定是咱胶东送来的。

(この小麦粉はきっとわたしの膠東から送って来たんだ。)

(119) 也宝记得哥哥送自己来的时候，就是坐这一路电车从那头来的，现在就该乘回那头去的车了。

(兄ちゃんに送ってもらった時、この電車に乗ってあっちのほうから来たのだから、あっちへ行く電車に乗ってもどればいいはずだ。)

(120) 昨天就是写到这里，来通知今天下午开会的，想不到会上会有人对自己提了那么些意见，…。

(昨日そこまで書きかけた時、今日の午後会議があると知らせがあったのだが、会議であんなに意見を出されるなんて思ってもみなかった。)

8.2 説明の意味での対応

ノダは説明というムードを担っているが、“是…的”構文も前をうけて、何か関連の説明を加える意味で野田春美(1997)でいう関係付けのムードのノダと対応している。とくに、実際では、原因を表す“是…的”文がノダ文に対訳されている例が多い。

(121) 坐久以后,我才发现这屋里还有一点光源,这是从我背后的一个窗户里照出来的。

(しばらくして、この屋内にそれでも光源が一つあることに気が付いた。それは私の後ろの窓から差し込んでいたのだ。)

(122) 这张纸下面是几张歌纸,这大概是为我收集的。

(その紙切れの下に数枚の歌詞があった。おそらくわたしのために集めたのだ。)

(123) 回头一看,见是昨晚穿白布衫的小伙子,又背了一个箩筐,远远地站在门外向小姑娘招手。大概又是来送清饲料的。

(振り向いて見ると、夕べの白い木綿シャツの若者で、娘に手招きをしていた。きっとまた緑草飼料を運んで来たのだろう。)

(124) 卫生员为难地说：“被子是借老百姓的。”

(看護兵はこまった顔で言った。「布団は…村の人から借りたものなんだ。」)

(125) 她的脸涨得通红,是让她她的学生们气的。

(彼女の顔が真っ赤になっていた。生徒たちのことをおこっていたのです。)

(126) “您好。这马么、跑得还不错 是公社借给我的。”

(「こんにちは。こいつはなかなかよく走りますよ。人民公社が貸してくれました。」)

(127) 是太阳晒黑的。

(日焼けして黒くなったのだ。)

終わりに

本稿で“是…的”構文の構造と機能を中心に考察してきた。その結果、“是…的”構文は既に発生したことについて特定の部分を強調しながら説明をしている。その強調される部分は文の焦点で、文中の位置・ストレスの置き方・文脈などによって決められるということが分かった。日本語で、“是…的”構文と対応しているのは、動作を表す動詞の過去形を前接するスコープのノダであり、原因を表す“是…的”と関係付けのムードのノダが対応していることが分かった。なお、“是…的”構文に本稿で扱えなかった種類がいくつかある。また“是…的”構文とノダ文が意味関係での対応する部分を見たが、構文的対応関係どうであるかはまだ明らかになっていない。これらは今後の課題としたい。

“是…的”構文の焦点と時制の問題（郭）

< 註 >

- 1) 本稿の規定は木村英樹（2002）と違うところがある。木村英樹（2002:2）では、次のようにこの種の“是…的”構文を規定している。
話し手と聞き手の双方が了解している既然の特定の出来事、すなわち一回的な既実現の事態に言及する。
必ず構文中のいずれか一つの項を新情報とし、そこに焦点を置く。
肯定文においては“是”を必ずしも必要としない、といった特徴をすべて備えるタイプの構文のみを指すものであり、恒久的、一般的行為動作を表すタイプ、原因解説型、将然の出来事などは含めない。
しかし、いくつかの点で訂正が必要だと思う。
見かけで一回的でない場合もあるので、説明が必要である。詳しくは「2. 述語の条件」のところで説明する。
一つの項とは何かについての説明がないが、必ずしも一つでないと思われる。またそれが必ず新情報であるとは限らない。
甲：昨天我和小弟在家玩儿，小弟把镜子打破了。
（きのう弟とうちで遊んでいたら、弟が鏡を壊してしまった。）
乙：没挨说吗？（叱られなかったか。）
甲：咳，别提了。明明是小弟把镜子打破的，可挨说的却是我。
（それが問題だよ。本当は弟が鏡を壊したのに、叱られたのは私だったのよ。）
肯定文においては“是”を必ずしも必要としないというのは間違いがないが、疑問文も同じである。
- 2) 张谊生（2000:230）では断片的ながら、“的”を時制助詞とする指摘がある。
- 3) これは中国語の一言節が不安定という特徴と関連があると思われるが、本題と関係がないので省略する。
- 4) 例文の出典
114 ~ 116：村上春樹 『ノルウェイの森』（林少华 訳）
117 ~ 124：茹志鹃 『百合花』（松井博光 訳）
125 ~ 127：张承志 『黑骏马』（岸陽子 訳）

< 参考文献 >

- 王亜新（1997）「日本語の「のだ」と中国語の「是……（的）」について」,東洋大学紀要 教養課程篇 36。
- 木村英樹（2002）「的」の機能拡張 事物限定から動作限定へ」,『現代中国語研究』2002 第4期,朋友書店。
- 邢福义（1996）『漢語語法学』,東北師範大学出版社。
- 杉村博文（1982）「「是…的」 中国語の「のだ」の文」,『講座日本語学 12 外国語との対照』,明治書院。
- 杉村博文（1994）『中国語文法教室』,大修館書店。
- 宋玉柱（1981）「关于时间助词“的”和“来着”」,『中国语文』1981 第4期。
- 田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 「のだ」と用法』,和泉書院。
- 土屋申一（1979）『中国語文法入門』,大学書林。
- 张谊生（2000）张斌 編 『现代汉语虚词』,华东师范大学出版社。
- 張黎・佐藤晴彦（1999）『中国語表現文法 28 のポイント』,東方書店。
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』,くろしお出版。
- 李讷・安珊笛・张伯江（2000）「談話文法における語気詞「的 de」をめぐって」,于康・张勤編（2000）『中国語言語学情報 1 語気詞と語気』好文出版（原載『中国語文』1982.2）。

主指導教員（船城俊太郎教授） 副指導教員（大石 強教授・中西啓子教授）